



## 城

総務部情報システム室 深草 祐一

## 第二十六回 原城と島原城

はら しまばら  
～島原の乱～

今回は、「島原の乱」を取りあげます。この事件については、棄教を強制された切支丹が起こした反乱で、この後に鎖国が完成したという印象が強いかと思いますが、歴史の意味としては、鎖国というより、むしろ国内政治への影響に注目すべき事件だったという説があります。

### 天草、島原での苛烈な支配と一揆の勃発

天草、島原は、切支丹大名の小西行長、有馬晴信の領地だったことから、領民にも切支丹が多い土地柄でした。しかし、小西行長は関ヶ原の戦いの結果、斬首。所領のうち天草は唐津藩の寺沢広高に加増分として与えられました。また、有馬晴信は長崎奉行暗殺未遂事件により切腹。息子が家督を継ぐも転封となり、島原半島は、後に大坂の陣で功を立てた松倉重政に与えられました。島原の悲劇はここから始まります。実質4.3万石の島原半島の石高は6万石と計上されたため、その分多くの年貢や賦役が課されることになったのです。さらに松倉氏は、5層の大天守と高石垣を有する過大な城の建設に領民を駆り立てました。そのような時に、数年連続して凶作が続きます。それにも関わらず、松倉氏は切支丹弾圧と年貢徴収の手を緩めず、蓑を着せて火を点ける「蓑踊り」や、雲仙岳の熱湯地獄に突き落とすといった残虐な刑罰を科し、苛烈に領民を絞り続けました。その状況は対岸の天草でも同様でした。ここでも寺沢氏による蓑踊りなどの暴虐極まる支配が行われ、領民は次第に追い詰められていきます。そして、自分たちがキリスト教を棄てたからこのような目に遭うのではないか、という社会不安が広がっていったのです。

そうした中、島原南部の有馬村で事件が起こります。切支丹への回帰を訴える領民の集会を解散させようとして暴力行為に及んだ奉行が、逆上した領民に殴り殺されてしまったのです。奉行を殺害してしまったからにはもうただでは済まぬと覚悟した領民たちは、結束して蜂起。一揆は半島南部の諸村に飛び火し、ついに島原城が包囲される事態となりました。

一方、天草では、ある宣教師が言い残したという伝説と符合する少年が現れます。天草四郎時貞(益田四郎)。関ヶ原後に浪人となった小西旧臣の息子でした。島原での騒動を聞いた領民たちは、少年を中心に結束し、ついに切支丹の世が来るとして天草の代官に詰め寄りました。代官は一旦穏便に事を収めたものの、報告を受けた本領の唐津藩から鎮圧軍が派遣されたため、領民たちの怒りが爆発。近隣の村人を仲間に取り込みながら、一揆の勢力は急激に膨れ上がり、富岡城に攻め寄せました。しかし、城を落とすには至らず、天草の一揆勢は、島原の一揆勢に合流し、廃城となっていた原城跡に立て籠もったのでした。

### 幕府軍との籠城戦

島原城の松倉氏は近隣の藩に援軍を要請しましたが、諸藩は武家諸法度を固く守り、兵を出そうとはしませんでした。ようやく知らせを受けた幕府によって鎮圧軍の出兵が命じられると、諸藩合わせて3万余りの軍勢が原城に向かいます。しかし、原城に立て籠もった一揆勢は老若男女合わせておよそ3万7千。小西、有馬の旧臣らによって軍制を整え、士気は旺盛でした。他方、幕府から派遣された鎮圧軍総大将の板倉重昌は1万5千石の小身であり、諸藩をまとめることができません。そして、士卒にも戦国世代はほとんどおらず、力攻めをしては散々に撃退され、いたずらに死傷者を増やすばかりでした。この時、肥後細川家に寄宿していた宮本武蔵も鎮圧軍に参陣していますが、脛をしたたかに打って逃げ帰ったといひます。また、勇んで参加した甲賀の元忍者は、原城への潜入を果たしたものの、方言が理解できず、追い詰められて半死半生で逃げ出したという話も伝わっています。

事ここに至ってようやく事態の深刻さを理解した幕府は、將軍家光の最も信頼する「知恵伊豆」こと松平伊豆守信綱を派遣することに決し、諸藩に向けて増援の派遣を命じます。そして総勢12万を超える大軍勢が投入されることとなりました。そうなる立場の無い板倉重昌は、



島原城

伊豆守到着前に決死の突撃を敢行し、討ち死にしてしまいました。現地に到着した伊豆守は、鎮圧軍の惨憺たる有様に、持久戦へ方針を転換します。さらに、キリスト教国からの援軍に期待する一揆勢の士気を挫くため、プロテスタントのオランダ船に原城への艦砲射撃を依頼したりもしました。そして、城内が既に飢餓状態にあるとの情報を得、討ち取った領民の腹を割いて、胃にろくな食べ物が入っていないことを確認したところで、総攻めを命じます。3万7千の領民達は、裏切った一人を残してことごとく斬りにされ、原城も徹底的に破壊されて、島原の乱は終結したのでした。

乱を鎮圧したとはいえ、幕府軍側の死傷者は一説によると1万2千に及んだと言われ、その被害は甚大でした。原因をつくった松倉氏は改易の上、二代藩主勝家は切腹も許されず斬首とされました。寺沢氏も天草の領地を没収され、後に藩主は精神異常で切腹したといわれています。一方、松平伊豆守に対しても、指揮責任を追及する声が上がりました。しかし、将軍家光に請われて齢72にして鎮圧軍に参加した柳川藩の立花宗茂が、歴戦の戦国武将の言として、伊豆守殿の采配に落ち度はなかったと報告したことで、皆黙ったといわれています。

## 島原の乱の影響

一揆勢は、半ば脅しをかけたつ切支丹でない者も含めて全ての村人を仲間に取り込んでいたため、乱に参加した領民を皆殺しにした後、島原、天草の大部分の農村から農民が一人も居なくなるという状況となりました。農民が居なくては当然年貢を取ることができません。幕府は近隣諸藩に命じて、兄弟がいる農民を

強制的に移住させました。代々島原南部や天草に住んでいる方々の多くは、そうして移住してきた人々の子孫だということです。

農民を苛烈に絞って反乱が起これば、それを鎮圧できても、武士に多くの死傷者が出る上、その後は年貢が取れなくなる。島原の乱によって突きつけられたこの事実は、年貢収入を基盤とした少数の武士による徳川幕藩体制に大変な衝撃を与えました。それは松倉氏への処分の厳しさにも表れていま

す。戦国時代以前までは、領主が思いのままに領民を支配し、逆らえば皆殺しにすることも当たり前だったといえます。しかし、島原の乱以降、そういった野蛮な考えは次第に改められ、武力による支配から法による統治へと変革されていきました。そして、五代将軍徳川綱吉による生類憐みの令にみられるように、命を大切にする近代的な社会へと脱皮していったのだとされています。

## 現在の島原城と原城

松倉氏が築いた島原城には、大天守が復興されています。幾重にも折れた高石垣と深く広い壕の豪壮さは、高々4万石余りの大名の城とは思えません。この城の建設のために、廢城にした原城などから大量の石材を運ばせたと伝わります。

乱の現場となった原城址では、近年の発掘調査により、夥しい人骨とともに城門や堀の跡が確認されたということで、当時既に廢城になっていたとはいえ、かなりの防御施設が残されていたことが分かってきました。これほどの規模の城郭に3万7千の一揆勢が籠城していたとすれば、とても強襲攻撃では落とせなかったでしょう。本丸の南側は海からそそり立つ断崖になっていますが、青い海と天草の島々を望む景色の美しさがより一層悲しみを深くさせるようです。



原城址 二の丸